

磯田湖龍齋にみる見立てその② — 名鳥坐鋪八景

○前原祥子

(武蔵野女未短大)

目的 中国宋代の「瀟湘八景」—— 山市晴嵐、瀟湘夜雨、洞庭秋月、平沙落雁、魚村夕照、遠浦帰帆、煙寺晚鐘、江天暮雪でそれぞれ七言絶句の詩にうたわれ日本にも伝えられて八景シリーズを生むもととなり、それをもとに製作された錦絵創始期の鈴木春信の代表作である「坐鋪八景」にヒントを得たと思われる湖龍齋の「名鳥坐鋪八景」について見立ての手法と小袖模様について考察する。

方法 春信の「坐鋪八景」は上方の狂歌師貞柳の「狂歌机の醒」の見立てとして描かれたもので、あうぎの晴嵐一図のみ戸外であと七図はすべて屋外で女二人の構成で成り立っている。それに対し湖龍齋の「名鳥坐鋪八景」は、一図以外はすべて男女二人の組み合わせで当時の珍鳥を仲立ちにして二人の愛情を月や雲、雨、雪などの景色を添えて一つの世界を作っている。狩野派、中国明清の写生画、オランダ経由の洋画等の影響を受け花鳥画を得意とした湖龍齋の「名鳥坐鋪八景」と春信の「坐鋪八景」と比較しながら見立ての観点と小袖模様について論を進める。

結果 春信の「坐鋪八景」は、貞柳作の狂歌を忠実に見立てたものであるが、湖龍齋の「名鳥坐鋪八景」は、座敷鳥としてのいんこ、きんけい、はいたか、きうくわん鳥、孔雀、あふむなどの舶来鳥と衝立ての鶯を仲立ちにして男女二人の愛情あふれる情景をくり広げた。これらの元になった中国の「瀟湘八景」にちなみ、菊水、流水、青海波、海藻に貝、観世水、紅葉に流水、水仙に雪、網干に波と水にちなんだものが多用され、戸外の背景に松竹梅が配されているのでお正月用の小袖の雛形本の役目をも果たしたと考えられる。